〔日総歯誌　第13巻　第1号：36～43頁，2021，10月〕

原 著

「口頭試問ヒント集」応用による総合歯科系診療参加型臨床実習改善の試み

瀬野恵衣[1)]　山田和彦[1)]　畠山純子[1)]
大曲紗生[1)]　山本　繁[1)]　松﨑英津子[2)]
樋口勝規[3)]　森田浩光[4)]　廣藤卓雄[1)]
米田雅裕[1)]

抄録：診療参加型臨床実習中の口頭試問は学生に知識不足や理解不十分な項目を認識させ，その後の復習に役立つと考えられる。福岡歯科大学の総合歯科系診療参加型臨床実習では，様々な職階の指導担当医が幅広い内容の診療指導を行っており，指導担当医によって試問の頻度や内容に差がある可能性がある。そこで，口頭試問を増やし，指導内容を均質化するために総合歯科学分野が講義を担当している保存修復治療に関する「口頭試問ヒント集」を作成した。また，その効果を判定するために学生（n＝85）および指導担当医（n＝13）に無記名アンケート調査を行った。

その結果，6割以上の学生が「口頭試問ヒント集」導入後は口頭試問の頻度が増えたと回答した。中でも今回作成した保存修復に関する口頭試問の頻度が増加しており，今回の導入がきっかけになったと思われる。また，9割以上の学生が口頭試問によって自身の知識不足に気づいており，全学生が口頭試問は知識の整理に役立ったと答えた。さらに，8割の学生が口頭試問を受けた後に自発的に教科書等で復習しており，過半数の学生が口頭試問を今より増やしてほしいと回答した。

今回の結果から，口頭試問および「口頭試問ヒント集」は，診療参加型臨床実習の学習ツールとして効果的であることが示唆された。今後は，「口頭試問ヒント集」の充実を図り，臨床歯科医学教育の充実を目指していく予定である。

キーワード：診療参加型臨床実習　口頭試問　保存修復治療　口頭試問ヒント集　アンケート調査

緒　言

診療参加型臨床実習は臨床に関する基礎的な知識を整理し，実技を体験し，さらに患者とコミュニケーションを行う重要な機会である。平成28年には歯学教育モデルコアカリキュラムと歯科医師国家試験出題基準の同時改定が行われており[1,2)]，臨床実習中の経験，知識が国家試験でも評価されるようになっている。

福岡歯科大学（以下本学）の学生は3学年，4学年で講義や模型実習を通して基礎的な知識，技能を習得している。そして，4学年末に実施される共用試験Computer Based Testing（CBT）およびObjective Structured Clinical Examination（OSCE）を受験し，「知識」，「技能」，「態度」を身に付けた学生が5学年の診療参加型臨床実習に参加している。しかし，Yonedaらの報告によると，診療参加型臨床実習中の歯科学生に，保存修復学の臨床技術に関する筆記試験を実施したところ，半数以上の学生がセラミックインレー装着前の調整や仮封に関する問題に誤答しているなど，臨床上必要な知識修得が不足していた[3)]。具体的な知識不足や誤った理解に気づき復習するため機会として，診療参加型臨床実習中における口頭試問の実施は，教員・学生双方において利点が大きいと考えられる。また，Rushtonらは，看護学生の臨床実習において，口頭試問は筆記試験よりも学生の理解や臨床応用能力をより効果的に評価できたと述べている[4)]。そして，学生からは口頭試問をストレスに感じたという意見も一部にあったが，「症例の理解につながった」，「口頭試問の内容を臨床に応用できた」など，肯定的な感想が多かったと報告している。

[1)] 福岡歯科大学総合歯科学講座総合歯科学分野（主任：米田雅裕教授）
[2)] 福岡歯科大学口腔治療学講座歯科保存学分野（主任：阿南　壽教授）
[3)] 福岡歯科大学医科歯科総合病院副病院長
[4)] 福岡歯科大学総合歯科学講座訪問歯科センター（主任：森田浩光教授）
[1)] Section of General Dentistry, Department of General Dentistry, Fukuoka Dental College（Chief: Prof. M. Yoneda）2-15-1 Tamura, Sawara-ku, Fukuoka-shi, Fukuoka 814-0193, Japan.
[2)] Section of Operative Dentistry and Endodontology, Department of Odontology, Fukuoka Dental College（Chief: Prof. H. Anan）
[3)] Assistant Director, Fukuoka Dental College Medical and Dental Hospital
[4)] The Center for Visiting Dental Service, Department of General Dentistry, Fukuoka Dental College（Chief: Prof. H. Morita）

本学の診療参加型臨床実習では各診療科で特色のある臨床実習を行っているが，総合歯科系（総合歯科，高齢者歯科担当）診療参加型臨床実習では，保存修復治療，歯内療法，歯周治療，補綴処置，高齢者歯科治療等，広範囲で基本的な治療を担当している。また，総合歯科系診療参加型臨床実習では教員，医員，大学院生と様々な職階の指導担当医が学生指導を行っている。以前から一部の指導担当医は診療の合間に簡単な口頭試問を行っていたが，統一した基準がなく指導担当医によって口頭試問の頻度や内容に差がある点が課題であった。

そこで，口頭試問の頻度を増やし指導内容を均質化することを目的に今回，「口頭試問ヒント集」（以下ヒント集）を作成した。これまで，各指導担当医が独自に口頭試問を行っていたが，実施するテーマを統一し質問と回答の例を示すこととした。前期，後期，ほぼ同様のプログラムで診療参加型臨床実習を行っているが，後期の診療参加型臨床実習からヒント集を応用した。本来は臨床実習の内容すべてを網羅すべきだが，今回はパイロット的に総合歯科学分野が講義を担当している保存修復領域についてのヒント集を作成した。そして，このヒント集の効果を確認し今後の改善につなげるための情報を得ることが必要だと考えた。そこで本研究では，学生・指導担当医双方に無記名アンケート調査を実施し，開発したヒント集を応用して一定程度テーマの統一化を図った後期診療参加型臨床実習の効果を予備的に検証することを目的とした。

対象および方法

1. 総合歯科系診療室での臨床実習

令和元年度福岡歯科大学口腔歯学部５学年生を対象とした。全 85 名の学生が指導担当医のもとで診療参加型臨床実習に参加し，医科を含むすべての診療科をローテーションで体験した。学生は 21 名または 22 名編成の４グループに分かれ，前期診療参加型臨床実習（4 ～ 7 月）および後期診療参加型臨床実習（9 ～翌年 2 月）で各診療科での診療および見学を行った。前期，後期の内容はほぼ同一であるが，学生は初診開始型としてローテーション期間に関係なく初診から一連の治療に参加するケース，学生紹介型として学生が準備した患者の治療を行うケースを習得することも求められている。歯科については総合歯科系診療室（総合歯科＋高齢者歯科）のほか，訪問歯科センター，保存科，歯周病科，補綴（入れ歯）科，インプラント科，口腔外科（スポーツ歯科），歯科麻酔科，放射線診断科，口腔外科，小児歯科，矯正歯科，障害者歯科などの診療科で実習を行った。前期診療参加型臨床実習（6 週間）は従来通り指導担当医の判断で口頭試問を行ったが，後期診療参加型臨床実習（13 週間）ではヒント集を使用し，一定程度口頭試問の内容を統一した。総合歯科系診療室では助教以上の教員７名が主指導担当医として，また大学院生・医員７名が副指導担当医として各自 2，3 名の学生指導を行った。

2. ヒント集の内容と使用法

ヒント集は A4 サイズ各１シートに口頭試問の例と解答例を記載した（図 1）。ヒント集のテーマは臨床で高頻度に遭遇し，国家試験でも問われるもので，次の 10 シートに分類した。①齲蝕除去，② Tooth wear，③コンポジットレジンその 1，④コンポジットレジンその 2，⑤メタルインレー，⑥コンポジットレジンインレー・セラミックインレー，⑦レーザー治療，⑧変

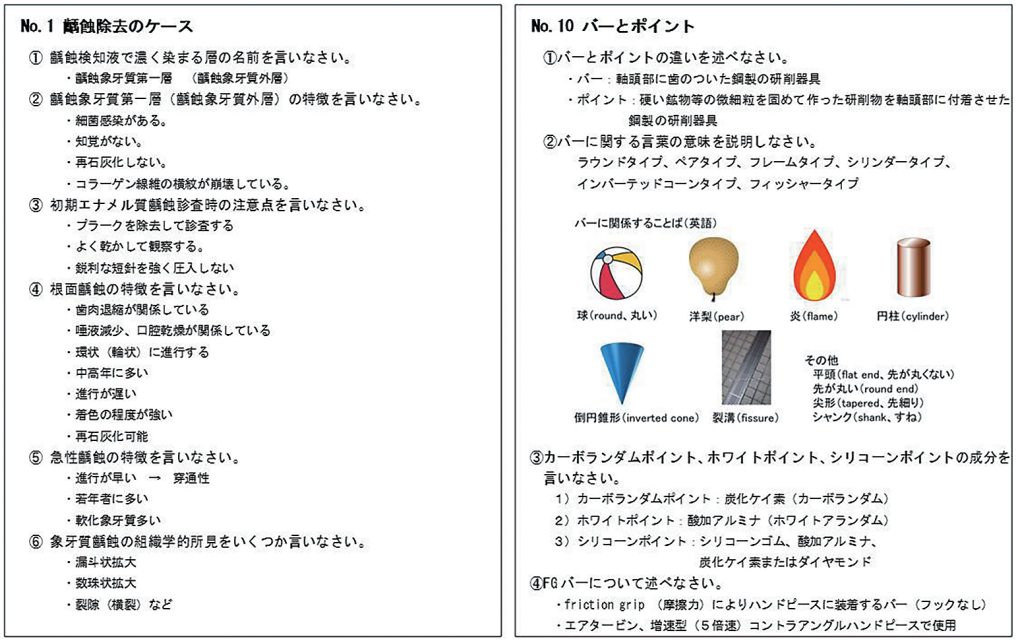


図 1「口頭試問のヒント」例
No. 1 齲蝕除去のケース　No. 10 バーとポイント

色・漂白，⑨ラミネートベニア，⑩バーとポイント。また，口頭試問の解答例は総合歯科学分野の保存修復学講義担当者で相談して決定した。保存修復学講義担当者は教授１名，講師２名で，講師２名は診療参加型臨床実習の主指導担当医も担当した。完成したヒント集は診療ユニットで使用できるようラミネート加工後，１冊に綴じ総合歯科系診療室のユニット 16 台に設置した。

指導担当医には「口頭試問のヒント集について」（図 2）を配布し，概要および使用法について説明した。指導担当医は診療・見学終了時に学生が診療・見学した症例に一致したヒント集を参考に口頭試問を行った。また，総合歯科系の診療参加型臨床実習では最終日までに保存修復学に関するレポート提出を義務付けており，レポート提出時に口頭試問を行う際にもヒント集を利用した。

口頭試問のヒント集について

作成の目的
・４年までの講義で知識を身に着けているはずだが、６年になると忘れていることがある
・臨床実習期間中に知識の整理ができていないと思われる。
・臨床実習期間中に知識の不足に気づかせることは意味があると考えられる。

使用法
1．診療の合間に時間があったら、症例に関係する内容をひとつふたつ試問してください
2．これはあくまでヒントであって、義務ではありません。
3．全部質問しないといけないとか、ケースに関係するとかいうことは全くありません。
4．何か疑問があったら、担当者に連絡してください。
5．学生に気づきのきっかけを与えるのが目的なので、すべての領域は網羅していません
6．各ユニットに１セット置く予定です。
7．ローテーション終了時に学生にアンケートを取って、次年度は改善していく予定です
8．ローテーション終了時にヒント集のコピーを学生に配布予定です。

今年度は下記のケースを準備予定です。
1．齲蝕除去のケース
2．Tooth wear のケース
3．コンポジットレジン修復のケース　その１
4．コンポジットレジン修復のケース　その２
5．メタルインレーのケース
6．コンポジットレジンインレー・セラミックインレーのケース
7．レーザー治療のケース
8．変色・漂白のケース
9．ラミネートベニア修復のケース
10．バーとポイント

図 2　口頭試問のヒント集について
指導担当医に対する説明資料

3. 学生に対するアンケート調査

後期診療参加型臨床実習の総合歯科系診療室ローテーション最終日にアンケート用紙（図 3）を配布し，無記名での回答を依頼し，記載漏れがないものについて，集計・分析を行った。第５学年学生 85 名全員から回答が得られ，回収率，有効回答率ともに 100％であった。

4. 指導担当医に対するアンケート調査

後期診療参加型臨床実習最終日にアンケート用紙（図 4）を配布し，説明や分析については，学生の時と同様に取り扱った。指導担当医 14 名（主指導担当医７名，副指導担当医７名）に対して無記名アンケート調査を実施し，13 名から回答が得られた（回収率，有効回答率：92.9％）。分析は Microsoft Excel を用いて行った。

5. 倫理的配慮

本研究は福岡学園倫理審査委員会の許可を得た（許可番号　第 534 号）。学生には調査の必要性を口頭および文書で説明し，研究に協力しなくても不利益がないことを伝えた。そして文書による同意が得られたものについて分析・公表を行った。

総合歯科系臨床実習中の口頭での質問に関するアンケート

臨床実習を改善するためのアンケートです。ご協力お願いします。
あてはまるものひとつに○をつけてください。

1．後期の口頭での質問は前期に比べて増えましたか？
（　）かなり増えた
（　）少し増えた
（　）あまり変わらない
（　）少し減った
（　）かなり減った

2．どのような領域の質問がもっとも多かったですか？
（　）保存修復領域　（　）歯内治療領域
（　）歯周修復領域　（　）クラウン・ブリッジ領域
（　）有床義歯領域　（　）口腔外科領域
（　）予防歯科領域　（　）その他（　　）領域

3．口頭での質問は知識不足に気づくきっかけになりましたか？
（　）とても気付いた
（　）少し気付いた
（　）どちらとも言えない
（　）あまり気付かなかった
（　）まったく気付かなかった

4．口頭での質問は知識の整理に役立ちましたか？
（　）とても役立った
（　）少し役立った
（　）どちらとも言えない
（　）あまり役立たなかった
（　）まったく役立たなかった

裏もあります

5．口頭での質問を受けた後、教科書等で調べましたか？
（　）必ず調べた
（　）ときどき調べた
（　）どちらとも言えない
（　）あまり調べなかった
（　）まったく調べなかった

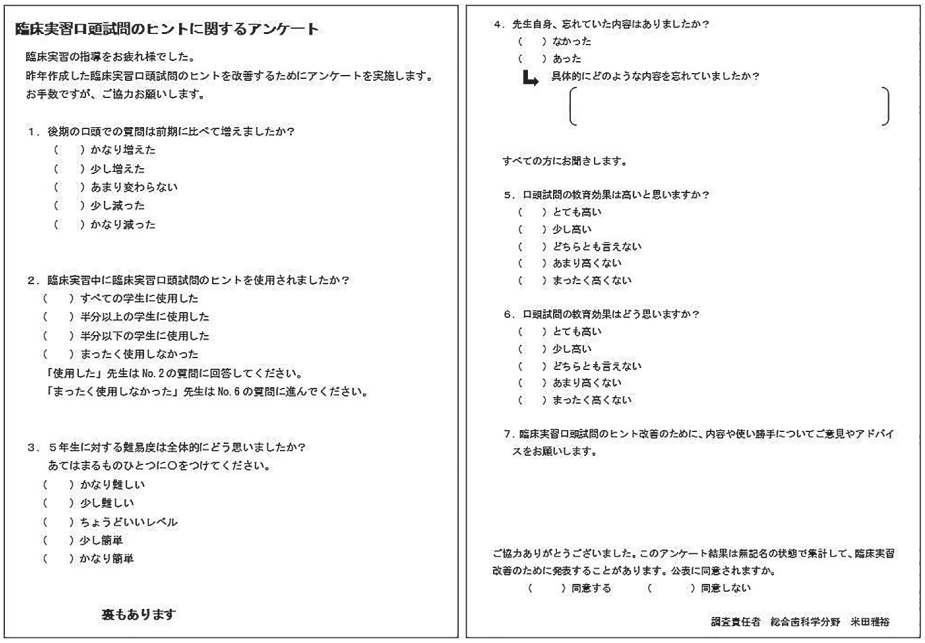
6．口頭での質問を増やしてほしいですか？
（　）ぜひ増やしてほしい
（　）少し増やしてほしい
（　）どちらとも言えない
（　）あまり増やしてほしくない
（　）増やしてほしくない

7．その他、感想や意見があれば書いてください。

ご協力ありがとうございました。このアンケート結果は無記名の状態で集計して、臨床実習改善のために発表することがあります。公表に同意されますか。
（　）同意する　（　）同意しない

調査責任者　総合歯科学分野　米田雅裕

図 3　学生向けアンケート



臨床実習口頭試問のヒントに関するアンケート

臨床実習の指導をお疲れ様でした。
昨年作成した臨床実習口頭試問のヒントを改善するためにアンケートを実施します。
お手数ですが、ご協力お願いします。

1．後期の口頭での質問は前期に比べて増えましたか？
（　）かなり増えた
（　）少し増えた
（　）あまり変わらない
（　）少し減った
（　）かなり減った

2．臨床実習中に臨床実習口頭試問のヒントを使用されましたか？
（　）すべての学生に使用した
（　）半分以上の学生に使用した
（　）半分以下の学生に使用した
（　）まったく使用しなかった
「使用した」先生は No. 2 の質問に回答してください。
「まったく使用しなかった」先生は No. 6 の質問に進んでください。

3．5年生に対する難易度は全体的にどう思いましたか？
あてはまるものひとつに○をつけてください。
（　）かなり難しい
（　）少し難しい
（　）ちょうどいいレベル
（　）少し簡単
（　）かなり簡単

裏もあります

4．先生自身、忘れていた内容はありましたか？
（　）なかった
（　）あった
↳ 具体的にどのような内容を忘れていましたか？
（　　）

すべての方にお聞きします。

5．口頭試問の教育効果は高いと思いますか？
（　）とても高い
（　）少し高い
（　）どちらとも言えない
（　）あまり高くない
（　）まったく高くない

6．口頭試問の教育効果はどう思いますか？
（　）とても高い
（　）少し高い
（　）どちらとも言えない
（　）あまり高くない
（　）まったく高くない

7．臨床実習口頭試問のヒント改善のために、内容や使い勝手についてご意見やアドバイスをお願いします。

ご協力ありがとうございました。このアンケート結果は無記名の状態で集計して、臨床実習改善のために発表することがあります。公表に同意されますか。
（　）同意する　　（　）同意しない

調査責任者　総合歯科学分野　米田禮裕

図 4　指導担当医向けアンケート

結　　果

1. 学生アンケートの結果

1）前期診療参加型臨床実習と比較した口頭試問の頻度と内容について

ヒント集を使用しなかった前期に比べ，ヒント集を使用した後期では口頭試問の頻度が「かなり増えた」17.6%，「少し増えた」43.5%と 6 割以上の学生が頻度が増えたと回答した（図 5）。また増加した口頭試問の内容については 70.8%の学生が修復関係を挙げ，以下，歯内関係，冠橋関係，義歯関係と続いた（図 6）。

2）口頭試問の学習効果について

口頭試問により，知識不足に気付いたかとの問いに「とても気付いた」80.0%，「少し気付いた」14.1%と合わせて 9 割以上の学生が自己の知識不足を認識していた（図 7）。「口頭試問は知識の整理に役立ったか」との問いには「とても役に立った」70.6%，「少し役立った」29.4%と全員が役に立つと答えた（図 8）。「口頭試問後，教科書等で調べたか」の問いには「必ず調べた」22.4%，「少し調べた」69.4%と 9 割以上の学生が口頭試問後に自発的に教科書等で調べていた（図 9）。

「口頭試問を今より増やしてほしいか」との問いには「ぜひ増やしてほしい」31.8%，「少し増やしてほしい」25.9%と，増やすのを希望する意見が過半数を超えた。「あまり増やしてほしくない」「増やしてほしくない」という回答はなかったが，「どちらともいえない」という回答が 42.4%あった（図 10）。

3）口頭試問に関する学生からの自由記載回答

「わかりやすかった」「知識が整理できた」「モチベーションが上がった」といった肯定的な意見が多かったが，「答えられないと，つらくて嫌な記憶になる」という意見もあった（表 1）。

2. 指導担当医に対するアンケート結果

1）ヒント集や教育効果について

主指導担当医，副指導担当医計 14 名に質問紙に対する回答を依頼したところ，13 名から回答が得られた。「前期と比べ口頭試問の頻度は増えたか」との問いに「とても増えた」5 名，「少し増えた」7 名と，ほとんどの指導担当医において口頭試問の頻度が増加していた。「変わらない」という回答は 1 名であった。また「どのくらいの学生に利用したか」の問いには「すべての学生」2 名，「半分以上の学生」6 名，「半分以下の学生」4 名であり，「使用しなかった」は 1 名であった。「難易度はどうであったか」との問いには「少し簡単」12 名，「かなり簡単」1 名と難易度は高くないように感じていた。「先生自身忘れている内容はあったか」との問いには 10 名が「あった」と回答した。「口頭試問の教育効果は高いと思うか」との問いには「とても高い」6 名，「少し高い」6 名，「どちらともいえない」1 名であった。「口頭試問のヒントの教育効果はどう思うか」との問いには「とても高い」11 名，「少し高い」1 名，「どちらともいえない」1 名と，口頭試問を実施すること，ヒント集を使用することには概ね効果があるとの回答が得られた。

2）教員からの自由記載回答（表 2）

「普段，自分では行わない内容の試問ができた」と回答した指導担当医や「忘れていた内容に気づいた」と

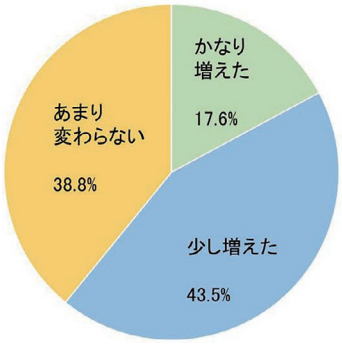


図 5「前期に比べて口頭試問の頻度は増えましたか？」に対する回答

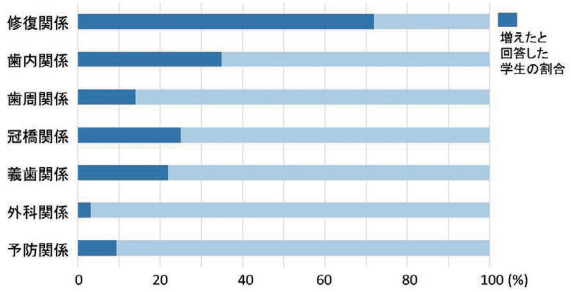


図 6「総合歯科系診療参加型臨床実習中に増加した試問の内容」

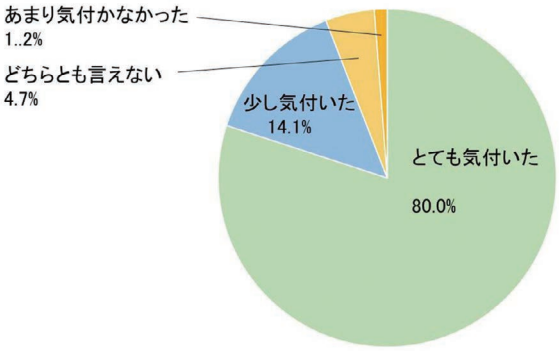


図 7「口頭試問で知識不足に気付きましたか？」に対する回答

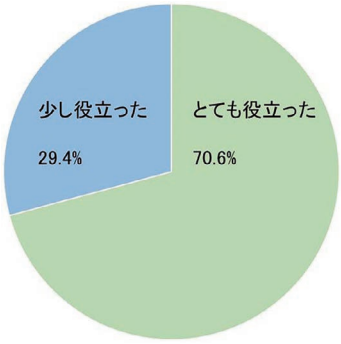


図 8「口頭試問は知識の整理に役立ちましたか？」に対する回答

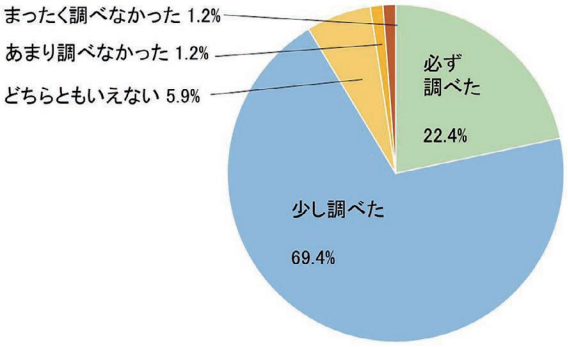


図 9「口頭試問のあと，教科書等で調べましたか？」に対する回答

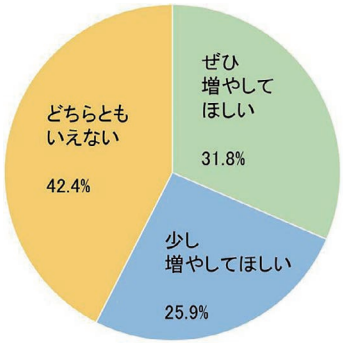


図 10「口頭試問を今よりも増やしてほしいですか？」に対する回答

回答した指導担当医がいた。一方，「患者が続く時は十分な試問が行えなかった」という指導担当医もいた。

考　　察

総合歯科系診療室における診療内容は，専門診療科と異なり治療内容が多岐にわたる。学生は様々な内容を見学・体験できる一方，自ら知識を整理し身に付けることが求められる。また，様々な職階の歯科医師が指導を担当しているため，指導の頻度やレベルにバラツキがある懸念もある。そこで今回，口頭試問の頻度増加と口頭試問内容の均一化を図ることを目的にヒント集を作成した。

学生に対するアンケート結果から，6割の学生が後期に口頭試問の頻度が増えたと感じたことが明らかになった。中でも保存修復領域の口頭試問が増加していたことから，今回作成したヒント集が口頭試問を行うきっかけとなり活用されたと推察される。また，ヒント集にはバー・ポイントに関する内容も含まれており，指導担当医が診療に用いた器具について口頭試問した可能性もある。

表 1　学生からの自由記載コメント（n＝9）

歯面接着処理の試問が勉強になった
実際に治療させてもらったあとの試問で，モチベーションが上がった
非常にわかりやすく，整理できた
試問と解説がとても勉強になった
試問の中で，根管治療の手順を覚えることができた
先生からの試問を増やすより，学生からの質問を一つ考えてもらったりとかがいいと思う
口頭試問がなかったので増やしてほしい
質問されて答えられないと，辛くて嫌な記憶として逆に忘却しやすいので質問されたくない
口頭試問を増やして欲しいかはライターによる

表 2　指導担当医からの自由記載コメント（n＝8）

普段，自分では行わない内容の試問ができた
バートポイントの違いを忘れていた
流れがわかるような表があると説明しやすいと思う
忙しい時は我流で行っていた
実際に行った治療のあとに，関連する口頭試問を行いたい
患者が続くときは十分な試問が行えなかった
変色歯の Feinman らの分類を忘れていた
学生は診断名と治療，治療の流れが理解できていないと思う

8 割の学生が，「口頭試問によって知識不足にとても気付いた」と回答しており，「少し気付いた」と合わせると 9 割を超えた。口頭試問の有効性は概念的にわかっていたが，今回の結果から口頭試問を行うことにより，知識不足を認識させることがわかった。さらに，すべての学生が「口頭試問は知識の整理に役立った」と回答した。診療や見学のあとに，指導担当医から質問されることによって知識の整理ができたと考えられる。また，9 割以上の学生が口頭試問でわからなかった点を自発的に教科書等で調べていた。口頭試問に答えられないことも多いと思われるが，疑問点をすぐにチェックすることで臨床と知識が結び付く効果が得られたと考える。

また，指導担当医にも口頭試問およびヒント集は教育効果が高いという意見が多かった。また，難易度は高くないという回答が多く，口頭試問のレベルとしては適正だったと思われる。指導担当医自身が忘れている内容に気付くことができたという回答もあり，指導担当医の知識の整理にも役立ったと考えられる。また，普段自分では行わない内容の試問ができたと回答した指導担当医がいた。日常的に講義をしている指導担当医は国家試験を意識した口頭試問を行っているが，それ以外の指導担当医は診療技術に関する口頭試問が多い可能性がある。今回導入したヒント集の使用を続けることにより，指導が標準化されることが期待される。

「口頭試問を今よりも増やしてほしいか」の問いに対し半数以上の学生が「ぜひ増やしてほしい」，「少し増やしてほしい」と回答し，口頭試問改善の試みは学生から一定程度の評価を得ていた。半数近くの学生が「どちらともいえない」と回答したが，「あまり増やしてほしくない」，「増やしてほしくない」という回答はなかった。今回，アンケート選択肢に「今の頻度でちょうどいい」がなかったので，現状でいいと思っている学生が「どちらともいえない」を選択した可能性がある。また，自由記載回答により「口頭試問を増やしてほしいかどうかは指導医による」「希望した指導医に付きたい」と思っている学生がいることが明らかになった。指導担当医の資質や指導担当医との相性で口頭試問の希望の程度が変わってくることも考えられる。1 名ではあるが「質問されて答えられないと，つらくて嫌な記憶として逆に忘却しやすい」と回答した学生がいた。今後，学生に過度のストレスを与えない口頭試問の方法を指導担当医間で検討する予定である。

臨床歯科医学は日々進歩を続けており，われわれは常に学習進捗状況を確認し教育で不足している点を見つける必要がある[5]。歯学系大学の教員は将来歯科医師になる学生を指導する重要な役割を担っているため，自らの教育法を向上させることが求められている[6]。過去の研究でも口頭試問によって学生の理解度を確認しながら自らの臨床的指導法を向上させることが重要だと述べられている[7]。

近年，診療参加型臨床実習の総括評価を実施する大学が増加している[8,9]。本学でもいくつかの課題について総括評価を実施しているが[10]，口頭試問のような形成的評価も併用することで，教育効果をさらに向上させる必要がある。

今回，パイロット的に保存修復領域のヒント集を作成・運用した。ヒント集を導入した後期診療参加型臨床実習では口頭試問の頻度が増加し，学生からも肯定的な意見が多く聞かれた。指導担当医についても口頭試問テーマの標準化がはかれたと考える。今後は，口頭試問のテーマ，質問内容や解答例の見直しを行い，教育効果をさらに高めていく予定である。

学生や指導担当医の主観評価により，ヒント集に対する肯定的な回答が得られたが，実質的な教育的効果は検証していない。今後，実習前後で理解度を問う筆記試験を行い，前後比較をするなど教育的効果の検証を行う必要があると考える。

結　論

今回，パイロット的に保存修復領域のヒント集を作成・運用した。アンケート調査の結果，学生・指導担当医双方から，口頭試問の実施は学習に効果的であるとの回答が得られた。また，ヒント集の応用により口頭試問の頻度も増加したと推察される。今後は，ヒント集の内容の充実を図り，試問の方法やヒント集の使用法について検討，改善を重ね，診療参加型臨床実習における学習効果の向上を目指していく予定である。

本論文の作成にあたり，利益相反事項はありません。

謝　辞

学生指導および研究にご協力いただいた福岡歯科大学総合歯科学講座医局員の皆様に厚くお礼申し上げます。また，様々なアドバイスをいただいた福岡歯科大学医科歯科総合病院 阿南　壽病院長ならびに福岡歯科大学総合歯科学講座高齢者歯科学分野 内藤　徹教授に深謝いたします。

文　献

1）歯学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議 令和元年度（第４回）フォローアップ調査まとめ．文部科学省　歯学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議．https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/035/toushin/mext_00269.html（最終アクセス日 2021. 5. 4）.
2）シームレスな歯科医師養成に向けた取り組みについて等 参考資料１　シームレスな歯科医師の養成に向けた取組の現状と課題．厚生労働省 医道審議会歯科医師分科会．https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_08010.html（最終アクセス日 2021. 5. 4）.
3）Yoneda M, Yamada K, Izumi T, Matsuzaki E, Maruta M, et al. Development of an error-detection examination for conservative dentistry education. Clin Exp Dent Res 2020；6：69-74. DOI: 10.1002/cre2.250.
4）Rushton P, Eggett D. Comparison of written and oral examinations in a baccalaureate medical-surgical nursing course. J Prof Nurs 2003；19：142-148.
5）Patel J, Fox K, Grieveson B, Youngson CC. Undergraduate training as preparation for vocational training in England: a survey of vocational dental practitioners' and their trainers' views. Br Dent J 2006；Suppl：9-15.
6）Kérourédan O, Smirani R, Oriez D, Péli JF, Seux D, et al. Self-perceived educational needs of junior assistant professors in Conservative Dentistry and Endodontics in France. Eur J Dent Educ 2018；22：e514-e521.
7）Youngson C, Fox K, Boyle E, Blundell K, Baker R. Improving the quality of clinical teaching in a restorative clinic using student feedback. Eur J Dent Educ 2008；12：75-79.
8）平成 26 年度歯科大学学長・歯学部長会議「歯学教育の現状と課題」．https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2014/10/02/1352252_6.pdf（最終アクセス日 2021. 5. 4）.
9）藤井規孝，竹中彰治，多部田康一，佐藤直子，秋葉奈美，他．新潟大学歯学部臨床実習における臨床能力評価．日歯教誌 2017；33：4-11.
10）畠山純子，春名千英子，松本典祥，水上正彦，松﨑英津子，他．臨床実習における総括的評価としての保存科新規課題「永久歯初期齲蝕に対するフッ化物塗布」の評価．日歯教誌 2017；33：20-29.

著者への連絡先
米田　雅裕
〒 814-0193　福岡県福岡市早良区田村 2-15-1
福岡歯科大学総合歯科学講座総合歯科学分野
TEL 092-801-0411（内線 125）FAX 092-801-4909
E-mail：yoneda@college.fdcnet.ac.jp

Trial to improve the clinical dental training in the Department of General Dentistry by use of "guidelines for oral examination"

Kei Seno[1)], Kazuhiko Yamada[1)], Junko Hatakeyama[1)],
Sami Omagari[1)], Shigeru Yamamoto[1)], Etsuko Matsuzaki[2)],
Yoshinori Higuchi[3)], Hiromitsu Morita[4)], Takao Hirofuji[1)]
and Masahiro Yoneda[1)]

[1)] Section of General Dentistry, Department of General Dentistry, Fukuoka Dental College
[2)] Section of Operative Dentistry and Endodontology, Department of Odontology, Fukuoka Dental College
[3)] Assistant Director, Fukuoka Dental College Medical and Dental Hospital
[4)] The Center for Visiting Dental Service, Department of General Dentistry, Fukuoka Dental College

Abstract：As a part of clinical dental training, oral examinations are effective in allowing students to recognize their lack of knowledge and understanding, and this will motivate dental students to study. In the clinical training program in the Department of General Dentistry at Fukuoka Dental College, instructors from a range of positions teach a variety of clinical subjects. Therefore, the frequency and the level of difficulty of oral examinations vary among instructors.

To increase the frequency of oral examinations and to standardize the level of questions, we developed some guidelines for oral examinations in restorative dentistry, which we currently teach. We also conducted an anonymous questionnaire which revealed that more than 60% of students noticed that the frequency of oral examinations increased after the guidelines for oral examinations were introduced. Oral examinations on the restorative dentistry, on which we introduced the guidelines, remarkably increased. This result suggests that the introduction of the guidelines was responsible for the increase of oral examination. More than 90% of students recognized their lack of knowledge, and all the students answered that the oral examinations were effective in organizing their knowledge. We found that 80% of students had willingly referred to their textbooks after an oral examination. More than half of the students requested that we increase the frequency of oral examinations in the future.

These results demonstrate that more frequent oral examinations and the use of guidelines for oral examinations seemed to be effective in improving clinical dental training. We will continue to develop the guidelines for oral examinations with the aim of further improving clinical dental education.

Key words：clinical dental training, oral examination, operative dentistry, guidelines for oral examination, questionnaire survey